朝の食卓

議論する博物館

持田　誠

2月6日、十勝管内浦幌町のラポロアイヌネイション（旧浦幌アイヌ協会）代表の差間（さしま）正樹さんが73歳で亡くなった。差間さんは、大学が人類学研究のために持ち去った遺骨を地元に取り戻す運動に永く取り組まれた。

返還後、「こうした悲しい出来事があった事実を伝えていってほしい」と、副葬品を博物館に全て寄贈された。博物館はこの思いを尊重し、今日も展示室で公開しているが、副葬品を展示することの是非については議論がある。当館の判断が唯一の正解ではなく、むしろ議論を続けていくことが重要に思う。

差間さんは、明治期に奪われた「川でサケを捕る権利」について運動を進め、裁判も起こしている。昨年5月、世界各地の先住民族が浦幌町に集まり、「先住権」を考える国際シンポジウムが開催された。

だが、開催地の浦幌町は「川でサケを捕ること」は係争中の案件として関わらないことを決め、後援も協力もしなかった。私は開催地の自治体として議論の場に加わる機会を失ったと、今も残念に思っている。

博物館は国や自治体のプロパガンダではない。モノや記録を残し伝える場であり、議論する場であり、観察して考える場でもある。常に議論する人であった差間さんの思いを今後も、地域の歴史として伝え続けなくてはならない。地域に良い意味で波風を立てる場としての博物館の役割を大事にしていきたい。

（浦幌町立博物館学芸員）

©北海道新聞社